

## みことばの種がまかれて

田部井 道子

讚美歌・四六一 「主われを愛す」

聖書・「伝道の書」一・二章一節 「あなたの若い日にあなたの造り主をおぼえよ」

今朝は、私ごとですけども、夫の母についてお話ししたいと思います。母はいま93歳。日常生活は二十四時間介護の中、訪問看護の支援を頂いて、長男と暮らしています。

今からお話する母は、六年前、87歳の時のことです。もうその数年前から認知症の症状が現れていて、一人て近所に散歩に出たつもりが帰りが分からず、家族で探し回ったことも何度となくありました。私たちが会いに行っても息子でさえ、名前はおろか、自分の子供であることもわかっていないようでした。耳元で「お母さん」と大きな声で呼びかけても、にこにこして「はい」と返事はしますが、名前を呼び返すことはありませんでした。母にとつては、普段一緒に住んでいる長男はお父さん、私の夫である二男はお兄さん、私はおねえさんということになっっているようでした。

その母がある朝早く、兄と散歩中に転び、顎を骨折してしまいました。不幸中の幸いだったのは転んだ場所が、自宅近くの大学の構内、しかもその付属病院の前だったことで、救急センターですぐに応急措置をもらい、そのまま入院し、検査の上、手術ということになりました。大学構内でのケガだからではないでしょうが、老人病科・顎口腔外科の医師たちがチームを組んで手厚く診てくださいました。

手術の日程が決まった時のこと。担当の医者から、少しやっかいなことがあると聞かされました。それは、「全身麻酔」をしなければならぬのだけれど、母のような人は、気持ちが安定している時でないと思わぬ事態にもなりかねないとのことで、医師たちは様子を見ながら慎重に行うとのことでした。

一週間後、手術となり、担当の医師は「すべて予定通り。三カ月で完治します。でも三十分ほど長くかかってしまいましたね。」とおっしゃったそうです。

母の症状には特徴があつて、気分が高まつたりすると、声は時に小さかったり、大きかったりですが、自分の気持ちをも、まるで、歌でも歌うかのようにリズムをつけて話しますというか歌いだす症状があります。そこには、全く脈絡はありませんし言葉もはつきり聞き取れることはできません。時には、少女時代にかわいがつていたコロチャンという犬の名前も登場します。そういう時は、自然に歌い終わるのを十分でも二十分でも待つことになりました。

手術当日、病室を出ようという時に、母はその症状が出て、小声で歌い始めたそうです。しかし、その時、医師たちは大変驚いたのです。というのも、一週間ほど入院していた間には聞いたことのないような、はつきりと、意味がわかる歌詞で歌い始めたからだそうです。

「よく聞いていると、どうも繰り返し「わが主イエス、わが主イエス、われを愛す」という歌詞が繰り返されていました」と話してくれたのです。付き添っていた兄によると、医師たちは手術室の扉の前で母が歌い終わるま

で待っていてくださったというのです。気が済むまで、歌わせてくださった医師たちに、私は感謝の気持ちでいっぱいでした。

普段一緒に住んでいる兄によると、「ほんとに時々だけれど、何かのきっかけで歌いだすことがあり、決まって歌うのは、『主われを愛す』。しかも歌詞を間違えずに繰り返し歌い続ける」とのことでした。

小学生になった子供たちを初めて教会に行かせたのは、母でした。一緒に歌ってくれた最初の讚美歌も「主われを愛す」であつたそうです。「女学校に入学して最初の礼拝で歌つた讚美歌だから忘れられない」と言っていたといひます。それは母にとつて70年も前のことです。

改めて考えさせられました。私たちは若い日には、色々なことを学び、身につけ、自分を高めていこうと、一生懸命に生きています。それはとても大切で、素晴らしいことです。しかし、やがて、年を経るに従つて、それまで身につけてきたものを、今度は一つ一つ静かに「はずしていく」。誰にでも、そのような時がくるのでしよう。

かつて「介護されるのはまっぴらよ」と言っていた母が、いま自分が介護されていることも分からずに、でもすべてを人に委ねての毎日です。

そして人生のまさに晩年を迎えている母は、これまで身につけてきたものを一つ一つそぎ落とし、いつしか自分の子供の名前さえもそぎ落としています。そしてその母にいま残っているものはわずかなものしかありませんが、その一つが、確かに女学校の時に歌つた讚美歌「主われを愛す」なのです。母の過ごした女学校、それはこの女子聖学院です。

母の若い時代は戦争の色濃い時代でした。「皆が大変な思いをしてきたのだから」と言つて、多くを語りませんが、戦争をくぐりぬげ、三人の子供を育てる中には、想像を超えた苦労があつたにちがいないと思うのです。その

ような時にも母を支え続けたもの、それはいつたい「何」だったのでしょうか。母の古い箏箏の引き出しには、いまも女学校時代に使っていた「聖書と讃美歌」が入れられています。

いま、母は93歳。讃美歌が流れる中、ベッドに静かに横になっている毎日です。声をかけると、言葉は出ませんが、時々目をこちらに向けて何となくほほえんでいる様に思えます。

そのような母に、洗礼を授けていただきたいと、教会の牧師先生にお願いをしました。母の意志を確認したわけではありません。しかし、「神さまは、女子聖学院の生徒の時からずっと母のそばにいてくださっている」、そしてどのような時にも、意識の遠のく中にあっても、「主われを愛す」の讃美歌に母は支えられている、神さまに支えられている、私たち家族にはそう思えてならなかったからです。

一昨年の六月一日、牧師先生は母に「田部井寧子さん、長いことお待ちしました」と声をかけて、洗礼を授けてくださいました。

一体神さまは、本当はどのように私たちをご覧になつていられるのでしょうか。私は、「神さまは出会った人を決してお忘れになることはない。いつまでもその人と共にいてくださる方にちがいない。」と思うのです。そして、皆さんにとつても、まったく同じように、神さまはこうして出会っている皆さんを決して忘れることはない、私はずう確信しています。

八十年前、女子聖学院で「みことばの種」がまかれ、神さまに出会った1人の卒業生。

今朝の聖書のことば、「あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ」。私にはこのみことばが、ますます真実なものとなつてきています。

皆さんのこれからの長い人生の道のり、何があつても、いつどんな時にも神さまに覚えられ、導かれていること

みことばの種がまかれて

をどうか心に刻んで、備えられた道を安心して進んでいっていただきたいと思えます。

(二〇一五年女子聖学院中学校高等学校チャペル礼拝より)

